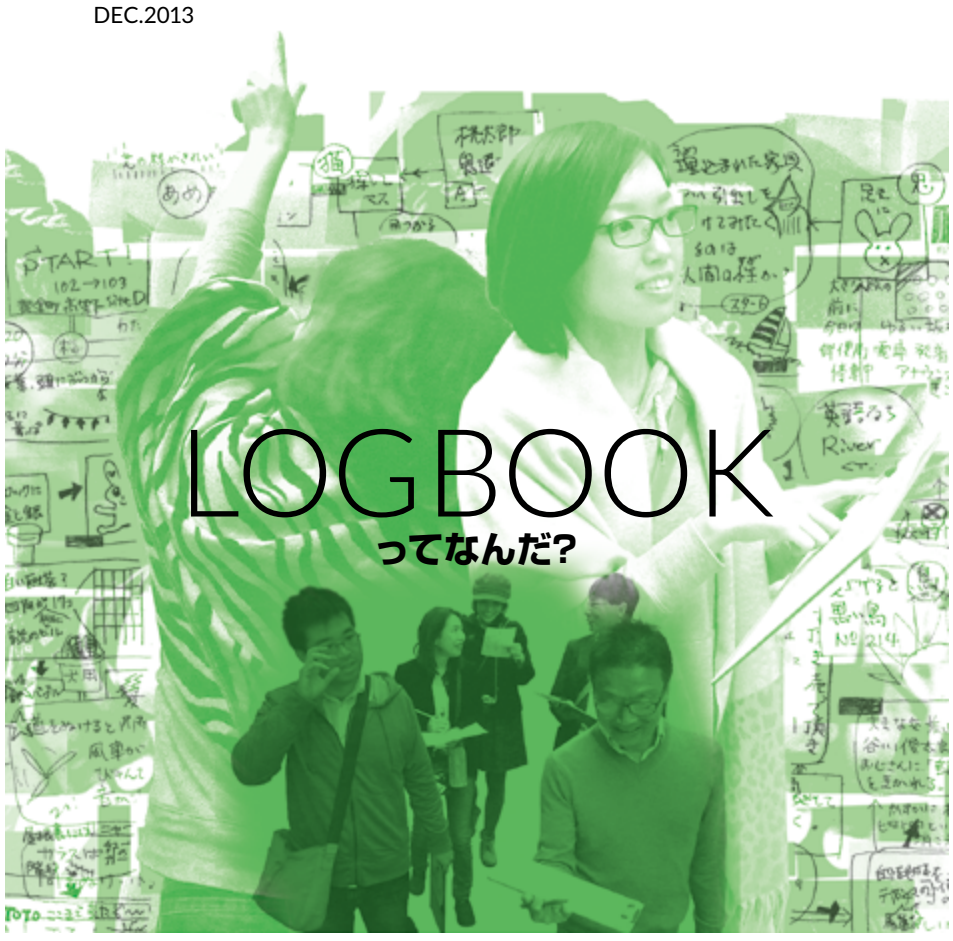
ヨコトリーツ!

横浜トリエンナーレサポーター's フリーペーパー　Yoko-Treats!

VOL.2
DEC.2013



LOGBOOK ってなんだ?

『ヨコトリーツ！（Yoko-Treats!）』は、「横浜トリエンナーレ」を応援し一緒に盛り上げる活動を行うサポーターによる手作りのフリーペーパーです。「トリーツ／ Treats」には、「思わぬ喜び、とてもいいもの」という意味があります。横浜のいいもの、楽しいものをお伝えしたい! ということで名付けました。ハロウィンの決まり文句 “Trick or Treat!”（「トリック オア トリート!」=お菓子をくれなきゃイタズラするぞ!）から連想して、みんながワクワクするような情報交換の場を目指しています。

ヨコハマトリエンナーレ2014「華氏451の芸術：世界の中心には忘却の海がある」
会期: 2014 年8月1日（金）～11月3日（月・祝）｜会場: 横浜美術館、新港ピア（新港ふ頭展示施設）｜アーティスティック・ディレクター: 森村泰昌
横浜トリエンナーレ公式WEBサイト　http://www.yokohamatriennale.jp/

情報化されない大切な忘れ物

ヨコトリ2014のタイトルは**「華氏451の芸術：世界の中心には忘却の海がある」**。

現代は情報化時代だとよく言われる。だから現代の中心には**「忘却」**ではなく、「情報の海がある」と言ったほうが正しいような気もする。でも、情報化されない多くの忘れ物がきっとあるはず。あなたにも、私にも、そして社会にも。

私はそこに注目したい。いやいや、忘れ物（=**「忘却」**）の中にこそ大切なものが隠されているのだと、様々なやりかたで教えてくれる芸術作品に注目したいと言ったほうが正しいかもしれない。

自分の目には見えないから信じないとか、情報化された枠組がないと安心できないとか、そういう傾向は情報化時代における現代病の典型的な症状ではないだろうか。幽霊なんか目に見えないから存在しないなんて言ってしまったら、もうあなたの想像力の泉は枯渇してしまっている証拠です。

というわけで、記憶や情報ではなく、ヨコトリ2014が注目したいのは、**「忘却」**のおもしろさや広大さや深さ。**「今回のテーマは忘却なんだって!」**。皆さんでこんなフレーズを広めていってもらえたら、とても嬉しいです。

ところで、ヨコトリ2014のタイトルの冒頭にある**「華氏451」**ってなに?

これはレイ・ブラッドベリの小説『華氏451度』（一九五三）のタイトルから引用しています。大切なことを忘れてしまった人々が住む近未来社会を見事に活写したSF小説の傑作。ヨコトリ2014のサブテキストと言っても過言ではない。ご興味ある方は、ぜひ御一読を。

©Morimura Yasumasa + ROJIAN

Morimura Yasumasa
森村泰昌

【森村泰昌 プロフィール】1951年、大阪市生まれ、同市在住。京都市立芸術大学美術学部卒業、専攻科修了。1985 年、ゴッホの自画像に扮したセルフポートレイト写真を発表。以後、一貫して「自画像的作品」をテーマに、美術史上の名画や往年の映画女優、20 世紀の偉人たちなどに扮した写真や映像作品を制作している。
ヨコハマトリエンナーレ2014アーティスティック・ディレクター。

横浜トリエンナーレ サポーター's フリーペーパー「ヨコトリーツ!」VOL.2 ●企画･編集: 横浜トリエンナーレサポーター フリペチーム（入江暢子／上田良寛／江藤真央／大澤歩／斉藤照子／深野一穂／布田翔太郎／山田崇之）●カバーアート／紙面デザイン: 山田崇之 ●編集アドバイザー: 藤原ちから ●発行日2013年12月15日 ●発行元･お問合せ: 横浜トリエンナーレサポーター事務局［横浜市中区日ノ出町2-158 黄金町エリアマネジメントセンター内｜TEL: 045-325-8654］●横浜トリエンナーレ サポーター 公式サイト　http://www.yokotorisup.com

次号予告　特集: こども向けアートチームの活動（仮）　2月中旬発行予定

横浜トリエンナーレ サポーター
4チームの活動報告!

横浜トリエンナーレ サポーターは、課外活動として4つのチームに分かれて活動中です。興味を持ったら誰でも参加できますよ!
サポーター公式サイト内ブログでも随時活動報告中!

イベント･企画チーム
ヨコトリをますます盛り上げていきましょう!

ヨコトリ開催300日前カウントダウンを終え、息つく間もなく森村展遠足からの～忘年会か･ら･の～来年も本展へ向けていろんな企画をたてていきます! 猫の手も借りたいのは相変わらず…（笑）私たちと一緒に、みんなでヨコトリをますます盛り上げて行きましょう☆ 今後の活動もcheck it out!（平野）

LOGBOOKチーム
ヨコトリでの実施に向けて発展させていきます!

いつでもメンバー募集中LOGOBOOKチーム!メンバーの年齢層は幅広く、現在15人程度が所属。11月3日には黄金町バザールで、11月10日にはサポーター課外活動においてLOGBOOKを実施し“手ごたえ”と“課題”をつかんだところです。これからどう発展していくのか、乞うご期待!（山下）

こども向けアートチーム
こども向けワークショップなど開催しています!

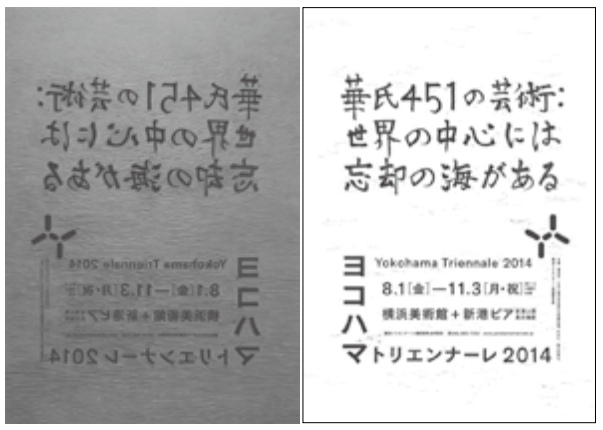
こどもたちがアートを身近に感じられるように、こども向けという視点で活動をしています。12月に、企画から運営まで行ったワークショップを初めて開催しました! こども向けのワークショップを実施するのは、ほぼみんな初めて。みんなで案を出し、意見を言い合い、練習を重ねて、ひとつずつ進めています。（伊神）

フリペチーム
楽しくなくっちゃ始まらないッ!

今号は「LOGBOOK特集」ということで、黄金町でのLOGBOOKにフリペ班も参加。当日は「取材」というよりイチ参加者として楽しんでた私たち。いいんです、取材でもなんでも、まずは自分が楽しくなくちゃ始まらないッ。そんなフリペ班で一緒に遊びたいという新メンバー、募集中です～。（大澤）

http://maoeto.tumblr.com

サポーターの活動に興味を持ったら・・・
横浜トリエンナーレ サポーター
公式ウェブページ
http://www.yokotorisup.com



ヨコハマトリエンナーレ 2014 のポスターをはじめとするビジュアルデザインは、イメージの版を彫ることで本展キーワードとなる「忘却の海」を再現しています。本デザインは、白と黒の対となるイメージで構成しています。白いイメージの、一見真っ白な余白には、“ 版を彫る ” という膨大な手作業の跡がかすかに残っています。他方、イメージの元となる版を撮影したもう一つのビジュアルが、その彫る行為を際立たせる答えとして存在します。

Yokohama Triennale 2014 Visual Design

有山達也／グラフィックデザイナー
葛西絵里香／ハンコアーティスト
マイケル・ランディ／題字

TRIENNALE SCHOOL 2013 vol. 9,10

トリエンナーレ学校2013
www.yokotorisup.com
参加申込は HP からお申込み下さい

トリエンナーレ学校は、横浜トリエンナーレを一緒に盛り上げるボランティア（= サポーター）活動の一環として 2005 年から始まりました。月に 1 回、様々なテーマを持った講座を設定し、楽しくアートに関する知識を身につけていく学校です。

春期講座

2/5（水） ヨコハマトリエンナーレ 2014 参加作家が語る！

3/26（水） 森村泰昌 × サポーター ヨコハマトリエンナーレ 2014 開催に向けて語ろう！

時間：19:00～21:00（開場 18:30）
場所：ヨコハマ創造都市センター 3F スペース
参加費：無料

ヨコハマトリエンナーレ 2014 プレイベント
スペシャルトーク
日時：12 月 23 日 (月・祝)12 ～ 13 時
会場：クイーンズスクエア横浜 1F クイーンズサークル
森村泰昌 AD × はな × ラジオ公開収録
ヨコトリ 2014 最新情報、サポーター活動紹介も！
収録内容は、12/29（日）8 時 30 分～ FM ヨコハマ「YOKOHAMA My Choice!」(FM84.7MHz) で放送

LOGBOOKで見えてくる。まちの息吹、あなたの記憶。（インタビュアー：大澤）

LOGBOOKプロジェクトを共同開発した、演出家の市原幹也さんと舞台制作者の野村政之さん。お二人はどのような思いでこのプロジェクトを立ち上げたのか？

――お二人が「LOGBOOKプロジェクト」を企画・開発したきっかけは？

野村政之（以下、N）：二〇一二年の四月に僕が関わっている劇団サンプルの北九州公演があったので、ちょっと早めに行って（市原さんが活動拠点としていた）北九州の枝光に滞在したんです。そこで得難い体験をさせてもらった――まちが「演劇」として見えるというか。かつて「鉄のまち」として栄えた枝光がだんだんと朽ちていく中で、人の営みも変化していく。この「まちの変化」自体がドラマだなと。そして僕もそこで「演劇」に参加させてもらえていることが嬉しくて。でもそれは、市原くんたちが耕している畑で採れた作物をもらって食べてるだけのような気がして、僕もちょっとでもお返しができないかなと思ったんです。で、市原くんに「今やりたいこと、ある？」と聞いたら「まちを記録に残したい」って。

市原幹也（以下、I）：そのとき僕は枝光にきて三年くらい。それまでは、広げて広げて、という運動ばっかりしていたけど、残しておくということはしていなくて。そろそろ風呂敷を畳むような作業をしなきゃいけないなと思い始めた頃だったんです。

N：僕がおこなっていたワークショップで「夢→物→語」というのがあって、例えば意味のない〝染み〟に意味をつけたりしながら、台本無しでパフォーマンスをつくるというものなんですが、このワークショップと、市原くんがやりたいことを合わせて「まち歩き」をやってみよう、と。且つ記録して、それをあとからやってきた人も体験できて、残された記録からまちの様子もなんとなく思い浮かべられる、そんなプロジェクトにしたいなと思ったんです。

――LOGBOOKでは、まち歩きで創作された地図を「logbook：航海日誌」と呼んでいますが、その中に「A：今日あって、明日ないもの」「B：十年後もあって欲しいと思ったもの」「C：自分の思い出に重なった／リンクしたもの」を必ず記載しますね。

N：AとBは、まちを演劇として見てその要素をピックアップしていくということなんだけど、Cはその人とまちの交差点なんです。「見た」ということだけじゃなく、見た人の「記憶」も入ってくる。LOGBOOKプロジェクトの目的は、まちを歩くことではなく、かつてそこにいた人や、いた人の心を体験すること。それがものすごく「演劇」だなと。でも、プロジェクト自体を「演劇」だと思ってほしいわけじゃなくて。

I：LOGBOOKはひとつの見方の提案。演劇的にまちを見ると「気付き」がある。時々参加した方から「自分の見たものなんておもしろくない」と言われるけど、僕は言うんです、「あなたが見た風景はあなたしか見ていないし、同じものは二度とない。それを記録して誰かの手に渡ったとき、特別なものになる」って。

――ヨコハマトリエンナーレ2014ではどのようなLOGBOOKになるのでしょう？

N：サポーターの皆さんがファシリテートするということなので、横浜という場所にあわせて自分たちのものにしてもらえれば。「LOGBOOKというプロジェクトを一〇〇パーセントばっちりやる」ということにフォーカスが定まってしまった瞬間、新たな発見は出にくくなってしまうし。まちを育てていくための栄養や刺激として、LOGBOOKがあればいいな。

I：「演劇」というより『航海』という「ごっこ遊び感」を出してもいいかなと。遊びゴコロをもって。

市原幹也（いちはら・みきや） 1978年生まれ、山口県出身。演出家。劇団「のこされ劇場≡」主宰。前・枝光本町商店街アイアンシアター芸術監督。まちの営みから着想を得て、作品の日常性と関係性を重視する演劇作品が特徴。平成24年度北九州市民文化奨励賞受賞。

野村政之（のむら・まさし） 1978年生まれ、長野県出身。劇団活動、公共ホール勤務を経て、07年より青年団・こまばアゴラ劇場制作。08年よりサンプル・松井周演出のほぼ全ての作品のドラマターグを担当。桜美林大学非常勤講師。アサヒ・アートスクエア運営委員。

LOGBOOKってなんだ？

「LOGBOOK」プロジェクトウェブサイト
http://logbookinfo.tumblr.com

サポーターの課外活動で実施されている「LOGBOOK」。しかし、この聞き慣れないプロジェクトがどういうものなのか、実際に参加しないとなかなかわかりにくいし、わかりにくいものにはなかなか参加しづらい。というわけで、去る11月3日に実施された『LOGBOOK in 黄金町バザール』と、11月10日の「課外活動vol.6〜LOGBOOKを使ってまちを航海しよう!〜」に、フリペチーム取材班も参加。「LOGBOOK」の面白さに迫ってみました!

ヨコトリサポーターLOGBOOKチームの『LOGBOOK』について
LOGBOOKの本来の意味は「航海日誌」です。ヨコトリサポーターが繰り広げるLOGBOOKは、横浜のまちを海に見立てて航海するような体験です。ガイドブックに載っていない横浜や、自身を知る旅でもあります。参加者は、誰かがまちを歩いてその記憶や体験を残した『logbook；航海日誌』を受け取り、それを手にまちを歩きます。そして今度は自分の記憶や体験から『logbook；航海日誌』をつくります。この一連のプロセスの繰り返しで“作品”が作り上げられていきます。航海という遊びを通じて誰もが参加でき、参加者が育てていく“作品”、それがLOGBOOKです。
（LOGBOOKチーム副船長 山下樹子）

航海日誌で、誰かの記憶を追体験

LOGBOOKは、ただのまち歩きとは違うらしい。「百聞は一見にしかず」ということで、LOGBOOKの魅力を知るために、航海日誌を片手に体験してみました。

この日の体験は、過去に黄金町を訪れた誰かが作った「logbook；航海日誌」（以下、航海日誌）を片手に、まちを歩きます。チームは９名。初めて黄金町を歩く人も、何度も訪れている人も、メンバーは様々です。はじめましてと挨拶を交わし、早速チームリーダーとなる「船長」を決めて、出発。

みんなで相談をしながら、航海日誌に書かれた通りに、お店の看板・道の標識などを見つけていきます。航海日誌とまちを見比べて、色々な思いを巡らせます。今はなくなってしまったものが、どんな形で存在していたのか想像したり、昔からそこにずっとあるだろうものが、これからどう変化していくのか想像しながら、ずっとそこにあってほしいと祈ったり、航海日誌を作ったときにはなかったものに、新たな息吹を感じてこのまちの将来を思い描く……胸に浮かぶ思いについて会話を交わしながら、チームは順調に航海を進め、１時間半をかけて航海を終了しました。

この日の航海日誌は、黄金町に点在する現代アート作品が目印に含まれていたため、作品も興味深く鑑賞し、予定終了時間を大幅に過ぎてしまいました。でも、ただまちを歩くこととも、アート作品だけを鑑賞することとも違う、不思議な充足感に包まれてゴールを迎えることができました。

さてここで、別の航海日誌でLOGBOOKを体験した方の声をご紹介しましょう。横浜市在住、40代の女性の方です。「娘と一緒に初めてLOGBOOKに参加しました。普段まちを歩いているときは、五感を全然使っていないということに気付かされました。歩きながら上を見たり何かに注目したり、見たものを別のものに例えたりするのはとても楽しく、また新鮮でした。」

そして、その娘さんの声。「ワークショップやものづくり体験に参加するのが大好き。今日初めて参加するLOGBOOKも、とても楽しみにしていました。他の人が作った航海日誌をみながら、いろいろなものを見つけたりするのがおもしろかったです。今度は家のまわりでもLOGBOOKをやってみたい。」

人はみな、違うものを見て、違うものを感じます。残念ながら、普段はなかなかそれを実体験としてシェアすることはできません。でもきっと、このLOGBOOKは、こうしていとも簡単に、そして自然に、誰かが見て感じたものをあなたの体験として、さらにはあなたとあなたの航海仲間の感動を加えて、新たな物語にしてくれるはずです。（入江）

「LOGBOOK in 黄金町バザール2013」で実施された「logbook;航海日誌」の一例。まち歩きをして印象に残ったもののほか、「A:今日あって、明日ないもの」「B:10年後もあって欲しいと思ったもの」「C:自分の思い出に重なった／リンクしたもの」が制作者なりのスタイルで記録されている。

ヨコトリでの実施に向けて　LOGBOOKチームでは「ヨコハマトリエンナーレ2014」に来場される皆様に楽しんでいただけるようなオリジナルのLOGBOOKを開発することと、“作品”づくりに参加する機会を提供することを目標としています。LOGBOOKには「誰かが記録した『logbook;航海日誌』を受け取り、その人の視点でまちを航海することで記憶の追体験をする」ことと、「自分がまちを航海し、『logbook;航海日誌』に記録する」という二つの楽しみ方があります。これが繰り返されていくことで、ひとつの大きな物語をみんなで紡いでいきます。いまLOGBOOKチーム内で暖めている案としては、「ヨコハマトリエンナーレ2014」の2会場間の地区を巡るLOGBOOK案と、アート作品を巡るLOGBOOK案があります。しかし、アート作品鑑賞の妨げにならない実施、所要時間別にメニューを用意する必要等、課題もあり検討中です。
（LOGBOOKチーム副船長 山下樹子）

いきいきした言葉で航海日誌を作る

写真に写らないまちの営みを記録してみませんか。あなたの思いをLOGBOOKで綴ろう。

誰かが作った航海日誌を片手に、黄金町のまちを２回航海しました。３回目はLOGBOOKというワークショップの理解をより深めようと、航海日誌の作成に取り組みました。

航海日誌は五感を駆使して体験するとの事前説明がありましたが、何を行うかは２回の航海で大まかに理解しています。航海に持参した物はメモ用のA4用紙数枚、筆記具、コンパス（方位計）、カメラ。短時間の体験なので改まった準備は不要。情報の整理は航海を終えてから行うことにしました。今回は一人で出発。歩いたまちは黄金町周辺、小さな商店や民家が混在する下町、私からすれば隣町。

背丈の異なる男の子・女の子二人ずつが、話をしながら私の前を歩いていました。兄妹にも仲良しにも見えました。この子たちは今しか見られませんが、10年後だって見かけたい光景だし、私のこどもの頃はどうだったかと記憶を辿りました。

商店の大半がシャッターを閉じているのは日曜日だからで、明日には活気が戻るでしょう。

姿は見えませんが、多くのからすの鳴き声が聞こえました。まちは開けているけれど、からすの生息できる環境は残されていると知れました。

横浜の赤門で知られる古刹の境内に閻魔堂。こどもの頃、嘘つくと閻魔様に舌を抜かれると脅かされた記憶が蘇りました。

40分ほどの航海を終えて整理を開始。まちから受けた思いをいきいきした言葉で表現するのは難しいものです。きれい・かわいい・面白いなど、何と躍動感のない言葉を羅列していることか。また「A：今日あって、明日ないもの」「B：10年後もあって欲しいと思ったもの」「C：自分の思い出に重なった／リンクしたもの」の分類も、自分なりの尺度を作るのは難しいものです。LOGBOOKはそのような気付きも与えてくれました。

LOGBOOKは弾力的な解釈が可能のようです。言い換えれば、多くのアイディアが受け入れ可能と言えます。航海した人は「宝探しのようだ」との感想を多く語ります。そして私は、多くのひとに私の思いが伝わる航海日誌を作りたいとの意欲に駆られました。

あなたもいきいきとした言葉で、あなたのまちの営みを伝えてみませんか。（深野）